

Title	W. A. Scott "The Development of Economics 1933"
Sub Title	
Author	浜田, 恒一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1933
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.27, No.12 (1933. 12) ,p.1919(123)- 1928(132)
JaLC DOI	10.14991/001.19331201-0123
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19331201-0123">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19331201-0123</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ある——ここに「皇帝の謂ゆる Oberzollregal の關係と Landesherr からの關稅徵收權賦與の關係とが發生する」とになり、この意味に於いてこの文書は法制史上興味深き史料たるものである。同時に「この文書は關稅率が比較的詳細に示されて居る最古のものであり、その後の關稅關係諸文書と共に、その關稅支拂手段を比較研究することに依つて」、經濟史乃至商業史の見地からしても重要な一史料となつてゐるものである。又、「ハンザ研究の上から見ても、ウトレヒトを始め下ライン、ゲルデルン及びフランデルン等のハンザ關係都市が多數關與してゐること、並びにそれ等諸都市の商人が支拂ふ商品の種類等からしても看過すべからざる史料」となるものである。(一一二頁)。

最後に城寶氏の筆になる右に掲げた後者に就いては別して評釋を試みる要はないであらう。

以上によつて、「西洋中世史料及考證」の持つ内容の一斑は、これを示し得たと思ふ。收められたもの孰れも對譯の形式を採つてゐるが、その勞まさに多とすべきものがある。しかもその研究對象の特質からして、讀者は自ら一定の範圍に限局せられ一般には流布し得難い性質を帯びるものと云はねばならないのである。それ故にこそ限定刷の形態をとられて居るものと推察するが、然し尙それ等の諸困難にも挫げず、一路當初志された目標に向つて邁進されんことを希望して止まない。聞くところによれば、近くその第四輯は刊行され本年度中には尙數輯が続いて發表せられる豫定であるといふ。この貴重なる企ての續行を切望するのは、ひとり紹介者のみの聲ではないであらう。

(一九三三・一一・八稿)

## W. A. Scott "The Development of Economics 1933"

濱田恒一

評者の信ずる處に依れば、經濟學の目的は歴史的である、例へば理論經濟學に就いて言へば、その目的は、抽象的には、經濟法則の探究であるといふも、具體的には必ず當時の社會經濟的事情に依つて問題の解決を要求されてゐる方面の法則が研究される、換言すれば經濟「學」の發展過程は、經濟の發展過程に制約されてゐる、經濟學史も御多分に洩れない、然らば現在に在つて經濟學史に要求されてゐる最大の任務は何であるか、それは經濟生活の發展に於いて、經濟思想が如何なる役割を演じて來たかを明にすることである、之を明にすることは、總て經濟思想と經濟の實生活との關聯、換言すれば經濟思想發展の法則の認識へ吾等を導き更に之に依つて、現代の經濟思想が現に演じ、又は演ずべき役割を把握し得るのである。例へば今日スミス研究に於いて吾等が重點を置くべきは、第一には「何がスミスの學說を生むたか」であり、第二には「それがあの時代に對し如何なる役割を努めたか」を知ることである。個々の理論に就いても同様である。スミス價值論の研究が有する現在の意義は、彼の勞働價值説が産業革命直前の時代に對する意義を把握することである。Labour commanded であるか將又 Labour expended であるかといふが如きは抑々末であり、之を究むることは單に素材的價值を有するに過ぎない。換言すれば理論の裡に潜める

現實性を看破する事が最重要である。過去の學説を單に學説として尋ねることは、パイオニアの仕事たる場合にのみ許さるべく、これとても進んで學説を實生活の一部として理解するに越したことはない。されば今日に在つて、經濟學史上既に充分開拓せられたる領域を論ずるに、這般の目的を忘却するが如きことあらば、その論述の價値は實に僅小なるべく、些か過酷な言辭を以てせば、存在の價値なきものと言ひ得る。

評者はかゝる立場に於いて本書を検討せんとするものである。勿論一個の書物の價値が種々なる視角から評價せらるべきものであることは評者も知つてゐるが、敢てこの立場のみを固守するは、この立場が經濟學史の最要の問題に觸れるが爲めと、他を論ずるの紙數が許されてゐない爲めである。

書名 The Development of Economics 1933. The Century Co. 發行

著者 William A. Scott. Ph. D., I.L. D. ユタコンシン大學名譽教授

本書は次の如く四編に分たれてゐる。(一)古典經濟學の背景、(二)古典經濟學の發展、(三)古典經濟學の初期批判、(四)經濟學再建の企圖。この區分は、一見、本書が古典經濟學の發達史を敘することを中心とするもの、如くであるが、事實は一般經濟學史である。かゝる區分は著者の序文に依れば、研究者をして理解を容易ならしむる方法として採用されたものに過ぎない。元來此書は何等かの新しき主張を學界に向つて爲さむが爲めに書かれたものでなく、經濟學史研究者の一般的教科書たり、指導書たることを目的とせるものである。洵に名譽教授の作物たるに適はしいものである。されば著者は他くまで「客觀的」態度を保持せむ事に努めてゐる。それ故に、本書には批判もなく、鋭い分析もなく、淡々たる敘述があるのみである。且つその敘述も甚だ平面的である。著者は經濟學發展

史上の主要諸段階が屬する各時代の經濟生活に就いて、通常行はれてゐる處以上に、大なる注意と紙數とを與へてゐると言明してゐるが、一向左様に思はれない。寧ろ近時の經濟學史研究上のかゞゞ傾向に比べて、却つて少い位である。且つその少い敘述は甚だ常識的であり非組織的であつて、單に經濟思想に影響せりと思はれる事情を漠然列擧するに止る。評者之を實例に依つて示さう。

第一編古典經濟學の背景なる題目下に取扱はれるものは重商主義及びフィジオクラシーである。著者はシュモラに從つて重商主義を「一國民的政策と理解したる後、之を主として英佛二國に就いて考へる。フランスに於ける重商主義の主體はコルベルティズムと考へられ、重商學派は之が反動と看做される。フランス重商主義の没落は所謂 Ancien Régime の行塞りと自然主義思想の興隆にその原因が見出されてゐる。これは決して間違ひではないが、コルベルティズムと Ancien Régime の關聯に就いての考察が無い爲めに、隔靴搔痒の感が著るしい。フィジオクラシーは一七六七年頃を以てその最高調時として衰頹する。その專制君主制の主張は多くの識者に好まれず、亦 Bourgeoisie に非常な不人氣となり、加ふるに不運にも、一七六六年の勅令に依つて穀物の對外取引の自由を認めたる處、その直後に穀價の非常な騰貴が起つて國民の不満を増大せしめたる等の事が起り、一七七六年の國家論出版は之に決定的打撃を與へたと述べられてゐる。

英國に於ける重商主義倒壞の「最も根本的原因」は「疑ひもなく」萬人に自然なる「自由の愛好」であつたと考へられる。實に時代離れのした考へ方である。重商主義が商人資本のイデオロギーであり、その故に産業資本の擡頭と共に没落した事は、今日に於いては經濟學史研究上の常識であらう。それはさてをき、重商主義と一致せざる諸觀念は早くも第十七世紀と共に始るものである、それ等諸觀念中に數へらるべきものは(一)國富の新源泉が自然と勞

働として、貴金屬に非ざること、(二)農業は外國貿易よりも重要なること、(三)國民的經濟政策の窮極目的は、全國民に對する生活必需品と便宜品との適當なる供給に存して、有利なる貿易差額に非ざること、(四)商工業の自由は保護的諸施設よりも繁榮を増進すべきこと、等々が擧げられる。そしてペチイ及びノースはかゝる新思想の先驅者と看做される。第一編はこゝで終る。

第十八世紀は實に重商主義の衰亡をみたるのみならず、個人的創意と企業心との發達をみたのである。産業革命の火蓋は既に切られた。農業に在つても、園牆は増加し、資本主義的大經營は着々として舊制度に代り、商業に於いても、古き獨占會社はフリーランサーの活躍に依つて崩壊しつゝあつた。かゝる時代の經濟生活並びにその產物の説明者として現れたものが、古典經濟學の創始者アダム・スミスであつたといふ。そして約二十八頁に涉つて「國富論」の分析的紹介が爲されてゐる。著者のスミス解説に就いては、二三異議を差挟みたい點はあるが、大體肯定される。これは敘述が所謂「客觀的」なる爲めと、及び例へば「國富論」と「道德情操論」の關係の如き、議論を生じ得べき題目が避けられてゐるからである。

次いで「デヴィッド・リカアドオとその分配論」が問題にされるのであるが、その間に「一七七六年より一八一五年まで」なる一章が置かれ、リカアドオ「原論」がこの間に起り來れる諸問題の解答として現れたる所以を明にせんとしてゐる。且つマルサスの人口論、アングアスン等の地代論等と同じく解答として既に現れ、之等がリカアドオ分配論に發展する所以を示さんとしてゐる。リカアドオに就いての記述は例に依つて例の如くである。

次にミルであるが、この場合にも「一八一五年より一八四八年まで」なる一章が置かれてゐる。著者の解する處に依れば、この時代は前時代の繼續であり、産業革命の完成である、同時に之に隨伴する弊害、殊に勞働階級の状態

の悪化が著るしく、こゝに改革運動が發生した。この運動は評者の意見に依れば、二つの對立的潮流をなした。その一はシャフツベリー等に依る自由の制限であり、その二はベンサム等に發する自由の増進であつた。著者の筆は主として後者に向けられてゐる。然も此時代が經濟學に及ぼしたる影響こそは本書當面の問題であるが、これこそはミルの生涯と著作中に最も良く見得られると主張される。

著者は他の總ての經濟學史家と同じく、ミルを以て過渡的思想家とみる。そして同時にミルの廣範なる智識がミルをして理論と實際との關係を良くみる事に於いて、スミスに比肩せしめたといふ。ミルの所説は三十四頁に渡つて述べられてゐるが、特に傾聴すべき意見を見出さない。かくて當初より數へて第百八十四頁を以て、古典經濟學の發展を終り、筆は之が批判的思想の敘述に轉じてゐる。

第三編古典經濟學の初期批判者として先づ國民主義者が擧げられ、論ぜらるゝ者はロウダアデイル卿、アダム・ミュラア、グニエル・レイモンド、及びフリードリッヒ・リストである。次は舊歴史學派即ちロッシュア、クニース、ヒルデブラントの三人、次は樂觀論者ケリー及びバスタア、次はシスモンデ、サンシモン、オーウエン、フリーエ、ルイブラン、ブルドーン等の空想的社會主義者及び「科學的社會主義者」ロオドベルス及びマルクスである。右の顔觸中、歴史學派やマルクスは異議ないが、ロウダアデイル卿やバスタアの如きは明かに個人主義者であり、當然古典學派に數へらるべき人である。著者も勿論これを知らないのではないが、著者の目的が單に「經濟學說」としての古典學派の發展敘述に在るが爲めに、或學者の全體としての立場よりは、その學說の個別的內容が古典學派の何等かの理論の修正となつてゐれば、之を古典學派の批判者中に數へるのである。

此處に國民主義者といふは、前記四人の學者が「古典經濟學を以て、經濟生活の國民的要素を適當に重んずる事

を忘つたと信ずる點に於いて一致してゐる」からである。併しこの引用句の如く「經濟生活の國民的要素を適當に重んずる」と抽象的に言つて了へば、如何にも四人は一致してゐるが「重んずる」意味は違ふ。少くとも經濟學史上彼等の特徴と思はるべきものは違ふ。ロウダアデイルとレイモンドとが「國民的要素を重んずる」といふのは、個人に對比して國民を重んずるといふ意味である。換言すれば部分たる個人を偏重することをやめて、全體たる國民を注視せよといふ意味である。一層端的に言へば、私利と公益の矛盾を指摘し、以て後者の尊重すべきを説いたのである。價值と價格の背離を説いたのである。然るにミュラー及びリストが國民主義者であるといふのは、經濟生活に於ける社會的諸條件の介入交錯を力説すると共に、之が歴史性を強調したことに存する。後の二人の思想は直ちにドイツ歴史學派の思想に連結するものである。前二者は強いて云へば寧ろ社會主義への道を指示するものである。勿論兩者は屢、同一思想を展開してゐる。時に後者は全體の重要を説き、時に前者は「歴史」に觸れる。併しその故を以て兩者を「國民主義者」なる同一項目の共に一括し「國民的要素を重んずる事に於いて一致する」と説くは、所謂ピントを誤つたものといへよう、併し國民主義者の貢獻を以て古典學派の事業の限界を指示せると共に、新しき研究の分野と、爲されるべき新任務を示せるものと云へるは妥當であらう。

次いで舊歴史學派と樂觀主義者とに關する所説は平凡。殊に新歴史學派をば舊歴史學派とは切離して最後の章に廻したる如きは、本書の構成方法の穩當ならざるを示すものである。これに依つて獨逸經濟生活の一面としての歴史學派の意義は全く閉却されて了つた。

次いでシスモンデイ、サンシモン、オーウェン、フリーエ、ルキ・プラン、ブルドーン等の空想的社會主義者を論じたる後、ロドベルトス及びマルクスの兩者が「科學的社會主義」の項目下に論述される。マルクスに關する敘述は最も不十分なもので唯物辯證法は愚か、唯物史觀に對してさへ一言も觸れてゐない。マルクスのかくの如き理解が、經濟學史的常識以下のものたる事は、改めて言ふまでもなう。

國民主義者、舊歴史學派、樂觀主義者及び社會主義者の四つを以て、著者謂ふ所の「古典經濟學の初期批判者」は終る。かゝる初期批判者の外に更に「最近五十年間に於ける、正統經濟學への反抗」を著者は見出すものである。この裡に包括されるものは、新歴史派、制度學派及び統計的經濟學の三者である。而して著者はこの「反抗」を以て、前時代に於いて舊歴史學派に依つて表明された「反抗」の「復活」と看る。些か言葉の末に囚れた議論になるが、これは復活よりも寧ろ發展と稱すべきものであらう。新歴史學派に就いては特に左様であらう。この運動を刺戟したるものとして、著者の擧ぐるものは、(一)ダーヴィン、スペンサーその他、進化の觀念の裡に新しき社會研究の道を見たる人々の著作、(二)經濟生活の急變と複雑化、(三)ジエヴォンズその他に依つて用ゐられたる演繹的理論に對する自然的反動の三者であるが、之等は著者の所謂「前時代に於ける反抗」の原因となれるもので、特に「反抗の復活」の原因と認め難いのであるから、矢張りこゝは復活でなくて、發展とみるべきものであらう。

さて新歴史派であるが、ドイツ學派からはシュモラー一人が選ばれ、英國からはクリップ・レスリー、イングラム及びアッシャーが選ばれてゐる。シュモラー一人を選んだ事は決して不當ではない。彼こそはドイツ新歴史學派の總帥であり、従つて彼に就いて語ることは、結局ドイツ新歴史學派に就いて語る事になるからである。シュモラーに就いて語るものが逸す可からざるは、社會政策學會の成立とその社會的意義である。周知の如く、その第一回大會に於けるシュモラーの開會演説は惟り新歴史派のみならず、ドイツ歴史學派全般の階級的意味を明示せるものであり、同時に當時のドイツに於ける社會經濟史的事情を反映するものであつた。然るに著者は之等の事を全く顧

みない。かゝる態度に對し評者は再び大いなる不満を表明せざるを得ない。

進んで英國歴史學派を論ずるに當つては、その社會的背景には一言半句も觸れてゐない。たゞ漫然と之を記述するに過ぎぬ。英國歴史學派は展、ドイツ歴史學派の「學問的影響」の結果であると主張されるが、評者はかゝる見解を誤謬であると信ずる。後者は或は前者の導火線となり、或はその指針ともなつたであらうけれども、既に古典經濟學はトインビーの言へる如く、勞働問題に當面してその行塞りを曝露し、社會的情勢の急速度の變化は新學說發生の基礎を形成しつゝあつたのである。クニースの言によれば、彼はコントを知らずしてコントに頗る似たる學說を唱導した。これは獨佛二國に同一の傾向が存した結果であつた、獨佛に起れる事は亦英國にも起つた。それが英國歴史學派であつて、決してそれはドイツ歴史學派の「學問的影響」の所産などではない。評者の信ずる處に依れば、外來思想はその思想の輸入國に於いて、之に適當なる物質的條件が備つてゐない限り、一學派を形成するに足る程の勢力を扶殖し得るものでない。一學派はその本質に於いて、常にその國土の所産である。

制度學派及び統計經濟學に關する著者の敘述も實に平面的である。

而して注意すべきは、右に述べたる新歴史學派制度學派及び統計學派の三者を敘する一章は實に本書の最終編たる「經濟學再建の企圖」なる一編の最後の一章たることである。然らば同編の他の諸章は何を取扱つてゐるか。

同編冒頭の一章は「七十年代初めに於ける斯學の状態」と題されクリフ・レスリー或は社會主義者の出現に依り、又勞働階級に依つて經濟學界に混亂が捲起され、之が反動的收拾者としてケアンズが出でたるを説く。一步を進めてケアンズと歴史學派との思想的架橋としてのパットに論及する必要があると思ふが、それは省略されてゐる。次いで賃銀基金説論争を型の如くに敘したる後、價值論、分配論、資本理論、發展の理論、貨幣及物價論に於ける

古典經濟學の弱點並びに方法論争を誌し、之等の結果として、經濟學の領域が擴大されて實踐的傾向を帯ぶると共に、方法に於いては歸納的現實的方法が多く用ゐらるゝに至つたことを敘して次章に移り、こゝに「最近五十年間に於ける二三の特徴」を指摘する。その一は「經濟事情の變化」で、説く處は技術及信用制度の發展、企業經濟の發生及び變化せる事情に對する適應の困難に就いてある。進んで歐洲大戰にまで論及し特に之が爲めに一節を設けてゐる。これは有用な事である。大戰を契機として資本主義は一の飛躍的發展を遂げた。之が經濟思想に及ぼした影響は深刻なものがある。然るに不幸にも著者は世界大戰を以て「戰爭」一般としてのみ理解し「經濟的平衡の最大なる妨害者」としてのみ理解するが故に、これと經濟思想の變化との因果關係を全然顧みない。例へば獨裁主義の發展の事實は認めても、その經濟的背景を理解しない。之れ故に折角設けた一章もその效用は甚だ微少である。變化は亦思想界に於いても大いなるものがあることを著者は認識し、特に注目すべきは、進化論並びに所謂「新心理學」の發展と普及であると言つてゐる。

斯る豫備的敘述の後に、メンガー及びオーストリア學派が先づ擧げられる。そして之に對して三百頁餘の紙數が割かれてゐる。これは全冊の約五分の一に當る。この事は例へばマルキシズムに八頁、ドイツ新歴史學派に五頁が與へられたること、對比して、適當なる紙數の配分とは云ひ難い、況んやその論述の方法たる、全くオーストリア學派の社會的經濟的背景に觸ることなく、單に歴史學派に對する反動と看做し、乾燥無味なる紹介に始終してゐる。説の當否は別としても、ブハーリンの取扱の方が如何ばかり生氣横溢たるものがあるか知れない。之が批評に至つても、陳腐なものを反覆せるに過ぎない。折角著者が力瘤を入れた處ではあるが、評者は之を詳述する勇氣を有しない。續してクラーク及びマーシャルが主題とされる。この兩者は、著者に従へば、同一の終極目的を追求せ

るものであるが、その方法は全く正反對である。クラークは思切つて「理論的」であるに對し、マージアルは理論の適用に對し常に制限を置き、例外を注意する。前者の傾向は固よりその天性に基づくものではあるが、同時にその舊師クニースに刺戟さるゝ事が大であつた。何となればクニースは歴史學派たるに拘らず、歴史家たるよりも寧ろ理論家であつたからである。マージアルは、著者に依つて、ジョン・ミルに對比されてゐる。彼はミルと等しく、古典的基礎の上に經濟學を近代化せんと企てたものである。「經濟學」原理の終極目的は實に「古き理論の近代的敘述」に存した。更にその人道的精神並びに勞働階級の生活水準を改良せんとする願望に於いても、亦ミルに類似するものであるといふ。

マージアルを説いて第二十一章を終り、第二十二章は價值及び分配に關する個々の學說の發展、例へば「社會價值論」「剩餘説」物價に關する二三の説等を紹介し、第二十三章に於いて、先に述べたる「七十年代に於ける正統派經濟學への反抗」を説き、全卷五百二十五頁を終る。

本書の價值を一言にして言へば、經濟學史研究の良き入門書であると云ふべきであらう。

## 田園型を排する都市計畫論

Town and Countryside: Some Aspects of Urban and Rural Development. by Thomas Sharp. Oxford University Press, London: Humphrey Milford. 1932 (p. 228)

奥井復太郎

### (一)

自然的な農村風景と人工的建築的な都會風景との對照は、從來の文明の姿であつた。此の對照は、或る意味では中世紀盛時に於いて最も好ましき形體として現はれた。即ち、歐洲中世都市の形體的特色を爲す、かの主體的建築的凝集的結晶體的構圖。城壁に圍繞せられ、城門、櫓、望樓をその周圍に聳えさせ更に中心部に於いて寺院の尖塔、圓屋根、鐘樓、又は宮殿建築等による求心的な立體的のマッシュヴな構圖。ゲシュロツセンハイトの強調。之れに配するにただらかな丘陵、河川、森林、草野。都會美と田園美との對照を主張する者は確かに、此の中世都市風景を讚美せずにはおられまい。

今、茲に紹介せんとする著書の作者も、此の傾向に加へらる可き者である。彼によれば、都會美と田園美とは、共に自然對人間の交渉に於いて發生した關係ではあるが、吾々の感覺に訴へる、美及び快適の二元的存在である。